

(公開授業Ⅰ) 第2学年2組 道徳学習指導案

授業者 木原 一彰
2年2組 教室

1 主題名 感謝の思いをあらわそう

2 資料名 心をたがやす～二宮金次郎(自作資料) (主として 2－(4) 尊敬・感謝)

3 授業構成

(1) 教師と教材

社会のなかで生きるためには、自らが社会のなかで生かされているという報恩・感謝の側面が必要である。一人ひとりが、社会の一員としての自らの在り方を考えることにより、人と人とのより豊かに結びつく社会へと変わっていくものと考え。そこで、本時の教材として二宮金次郎の幼少期を題材とした伝記資料を用いることにした。道徳的価値は人間の生きることに関わるものである以上、単に高い価値としてあらわれているというだけでなく、そこに込められた人間としての在り方や生き方、リアリティーが感じられるものである必要がある。そういった意味で、道徳の時間における感動資料としてもっとも適切なもののひとつが伝記資料であると考え。

本資料は、二宮金次郎の幼少期のエピソードのひとつを取り上げる。厳しい生活のなかで、家族の生活を支えるために金次郎は自らすすんではたらく。村人が総出で土手をなおす仕事をしていたとき、病気の父の代わりに参加していた金次郎が、切れて捨てられたわらじを集め、村人のためにわらじをなおし、黙って土手に置いた。自分のためでなく、他者のために自分ができることについて考え、実践する金次郎の姿に村人が心を打たれるという資料である。この資料での学習を通して、子どもたちに、他者の喜びを自らの喜びとして生きることのすばらしさを感じさせることができると考える。そこで、本時の学習は、他者とのかかわりのなかで、人々に支えられて自分があり、人々や公共のために自分に何ができるかを考えていく。そのために、自分のために何かをするだけでなく、他者の喜びのために働くことが自分の喜びとなるという自己有用感を感じさせることが重要である。自己を理解し、自己を社会という他者とのかかわりのなかで生かしていこうとする道徳的実践力を育むことができるよう活動を深めていきたい。

なお、本時では、主として内容項目の2－(4)「尊敬・感謝」をねらいとしている。しかし、本資料のなかには、「勤勉・努力」「創意」「家族愛」など多用で学年の枠を超えた価値内容が含まれていると考える。よって、子どもたちの話し合い活動のなかで、様々な価値にふれた発言を引き出した。子どもたちがどのような視点から語ったとしても、そこには二宮金次郎というモデルを通して考えた、家庭や地域へのかかわりの在り方があらわれている。そして、自らの生活と重ねて考えたときに、社会に主体的にかかわり、自らの存在を他者とのかかわりのなかで価値あるものとしてとらえなおすことができるように活動を構成したい。

(2) 子どもと教師

本学級の児童は、これまでの道徳の学習において話し合い活動を充実させることに主眼を置いて進めている。絵本や読み物資料を活用しながら、資料の登場人物の思いを考えるために、自らの生活経験をふまえて話したり、「なぜ」「どうして」そのような気持ちになったのか、より深く考えていこうとしたりする姿が見られるようになってきた。また、動作化や役割演技など、子どもたちの表現する力がより高まるような活動を取り入れることで、考え、表現することが楽しい道徳の時間をめざしてきた。

また、学校の教育活動全般では、1年生との交流、附属特別支援学校との交流、生活科における野

菜づくりなど様々な体験を通して他者との関係性に目覚め、集団の一員としての資質を身につけられるように活動を構成してきた。子どもたちも、機会あるごとに、他者とのかかわりのなかで自分を見つめようとしてきた。

そこで本時では、病気の父親のかわりに働く金次郎の思いや、夜中に心をこめてわらじをなおす金次郎の気持ちについて考える活動を通して、自分のためではなく、家族や村人のために働こうとする金次郎の気持ちに共感させたい。そして、村人のために切れたわらじをなおして、自分がしたと名乗らずに土手に置く金次郎の思いについて考える場面では、「なぜ自分がしたことを言わなかったのか」について、動作化や役割演技をいれたり、子どもたちの生活と重ねた発言をうながしたりすることで、他者の喜びを自分の喜びとして生きることが、社会の一員として生きるうえで大切であるということに気付けるよう話し合いを深めていきたい。そうすることで、二宮金次郎の生き方のすばらしさを感じ、自分を取り巻く社会のなかで、自分がどうありたいかについて考え、実践していこうとする意欲を高めていきたいと考える。

(3) 子どもと教材

本時の主なねらいとする価値に関する児童の実態としては、学級内外で、「ありがとう」「どうぞ」という尊敬・感謝を表す言葉が多く聞かれる。また、様々な交流活動のなかや、公共機関を利用するなかで、自らの意志と内発的動機付けによる、他者を思いやる心のあらわれた姿も見られるようになってきた。一方で、毎日の仕事で「自分がこうしたいから…」という気持ちだけで、まわりの状況を考えずにすすんでしまう部分もある。発達段階として自分中心に自己をとらえがちではあるが、他者との関係性のなかで自らを見つめ、自らを律することが必要であると感じている。そのためには、子どもたちに、他者とのかかわりのなかにある自分の姿を見つめ、かくありたしと思えるような意志的価値を多く含んだ伝記資料による学習を進める必要がある。普遍的な価値について理解を深め、自己を見つめていくことで、主体的な価値感の形成が可能となると考える。

本時の展開のなかで、子どもたちは、「なぜ、心をこめてなおしたわらじを、自分がしたと名乗ってもせずに土手に置いておいたのだろう」という部分に話し合いの中心を置くと考えられる。単に資料のなかの言葉で金次郎の気持ちを表現するのではなく、家族の代表として病気の父の代わりに土手なおしに参加している金次郎の強い意志を支えているものは何かという視点を持たせながら考えていく。そうすることで、自分のまわりにいる家族や村の人々への感謝の念から、人々や公共のために自ら役に立とうとする金次郎の思いに迫ることができる。そして、他者のために何かができる喜びの広がりが、わたしたちの住む社会にも必要だということを自らの経験を振り返らせるなかで実感させていきたい。

4 本時の学習

(1) 本時の目標

家族や村人に対する感謝の思いをもち、進んで働いた二宮金次郎の生き方に迫る話し合い活動を通して、今の自分を支えてくれている人への感謝の念をもち、自ら進んで家族やまわりの人々のために活動していこうとする心情を育てる。

(2) 期待される児童の様相

- ・ 家族のため、村のために自ら進んで働く二宮金次郎を支えた思いは何かについて、彼の在り方生き方を通して考え、話し合う。
- ・ 話し合いを通して、他者のために働く姿の尊さや美しさについて感じたり考えたりしている。
- ・ 二宮金次郎について学んだことから、自分の生活を見つめ直し、今、自分がどう在りたいかについて考えようとしている。

(3) 準備

資料「心をたがやす〜二宮金次郎」、提示用写真、場面絵

(4) 本時の展開

(◇：全体への支援 ◆：個への支援 ○：教師の意図)

学習活動	主な発問と児童の反応	教師の支援・意図
導入 1, 感想の分析 2, 問題の焦点化・共通化	○資料「心をたがやす〜二宮金次郎」を読んで各自が感想をもつ。 ○資料の主人公の生き方に対して、心に残ったのはどんなところか。 ・家族のために田畑を耕し、縄をなっているところ ・病気の父親のかわりに働くところ ・村人のために心をこめてわらじを直したところ ・自分がわらじを直したのに知らん顔をして仕事を続けたところ	◇資料の内容を正しく共感的に把握させる。 ◇資料の主人公である二宮金次郎についてその銅像を例に出して紹介する。 ○二宮金次郎の家族のために働く姿や彼の知恵と工夫について、感想や問題意識をもつ児童が多いと考えられるので、問題をその部分に焦点化していきたい。
二宮金次郎がどんな思いで働いていたのかについて、話し合い活動を通して迫ってみよう		
3, 問題の明確化・追究	○「休めよ」と村の大人から言われても金次郎が働き続けたのはどんな思いからだろう。 ・この土手を早く直さないと、また洪水が起きるから。 ・病気のお父さんの代わりだからがんばろうという気持ちだった。 ・お父さんが元気ならならもっとがんばれると思うから、自分もがんばった。 ・自分は子どもだから、足りないぶんをがんばろうと思った。 ○金次郎は、どんな気持ちでわらじをなおしていたのだろう。 ・まだはけるわらじだから、捨てておくのはもったいない。 ・みんなに喜んでもらえるぞ。 ・お父さんの分も働くために、みんなのわらじを直そう。 ◎金次郎は、なぜ、自分がわらじをなおしたことを言わなかったのだろう。そこにはどんな気持ちがあったのだろう。 ・みんなに自分がしたことを話すのが照れくさかった。 ・自慢のようになってしまったから。 ・お父さんもそうしていたと思うから	◇まじめに働いてきた父の生きざまと、そのために病気になってしまったこと、父の代わりとして村の仕事に参加していることなどをふまえ、金次郎の土手直しの仕事に対する思いについて話し合い活動を通して共感的に想像することができるようにする。 ◇この土手を修復することによって父親が元通りにした田畑が守られることから金次郎の気持ちを想像させたい。 ◇心をこめてなおす金次郎の気持ちを問うていくことで、自分のためではなく、村の人のためにはたらこうとしていく気持ちに気づかせたい。 ◇父の後押しも、金次郎の行動を支える一因となっていたことにも気づかせたい。 ◇単になぜそうしかただけでなく、その背後にある気持ちにまで迫れるように、役割演技を通して思いを多用に表現させたい。 ◇村人のためにわらじを直したにもかかわらず、自分がしたと明かさな金次郎の姿について、彼の仕事に対する

昨今の日本における社会の状況を考えるとき、個の私的空間というべき領域が拡大し、集団が互いの活動の場として共有すべき公共社会の領域が崩壊してきつつあると感じる。モラルの低下といわれるものの一因もここにあると考えられる。今、わたしたちは、公共社会のなかで自らを生かす在り方、生き方が問われているといえるであろう。社会の一員として社会のなかで生きるということは、自ら他者と主体的にかかわり、他者との関係性のなかで自らを生かすという能動的な側面がある。決して、他者から何かをしてもらうだけの受動的関係性のみによって社会が成立しているのではない。また、

伝記資料のなかにある人の生き方に対する感動は、子どもたちがこれまで気づかなかった新たな視点から価値をみつめ、さらに深く自覚することを可能とする。そして、資料のなかの人間の姿を通して、その生き方をひとつのモデルとし、自らの生活と重ねて考えることで、自分の生き方に落とし込んでいくことができるであろう。つまり、